

今週の為替相場見通し(2023年8月28日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		144.55 ~ 146.64	146.47	144.00 ~ 149.00
ユーロ	(ドル)		1.0766 ~ 1.0930	1.0794	1.0650 ~ 1.1000
(1ユーロ=)	(円)		156.89 ~ 159.49	158.11	156.00 ~ 159.50
英ポンド	(ドル)		1.2548 ~ 1.2800	1.2577	1.2400 ~ 1.2800
(1英ポンド=)	(円)	*	183.36 ~ 186.77	184.20	182.00 ~ 187.00
豪ドル	(ドル)		0.6380 ~ 0.6488	0.6403	0.6350 ~ 0.6500
(1豪ドル=)	(円)	*	92.84 ~ 94.18	93.78	93.00 ~ 95.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第一チーム 松本 悠馬

(1) 今週の予想レンジ: 144.00 ~ 149.00 円

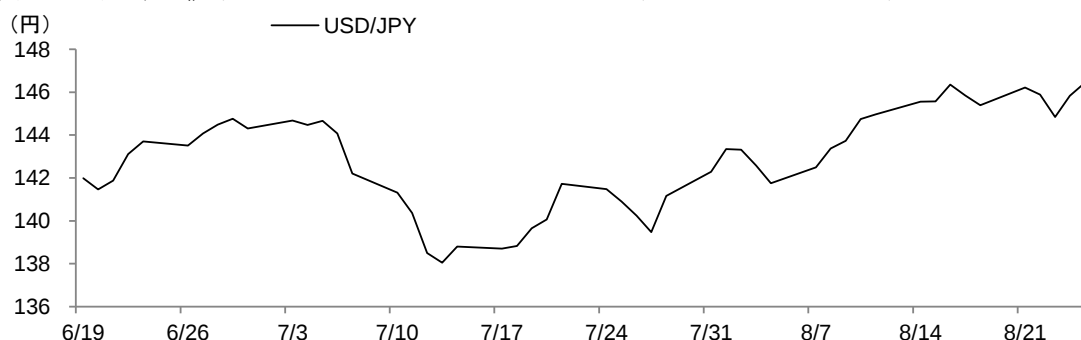
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、米長期金利が昨年の高値を更新する流れに合わせ上昇した後、下に往って来いとなった。週初21日、145.33円でオープンしたドル/円は、ドル高・人民元安につれ小幅に上昇。海外時間は、良好な市場心理から米金利が上昇する中、146円台半ばに続伸した。22日、ドル/円は米金利続伸に合わせ一時146.42円に続伸も、「日銀総裁と首相が会談」とのヘッドラインを受けた円買いもあり、145円台に反落した。海外時間は米金利動向につれ上下も、145円台後半をメインとしたレンジ推移にとどまった。23日、ドル/円は米金利低下を受け、145円台後半でじり安推移。海外時間は米8月製造業/非製造業 PMI(速報)の軟調な結果を背景に、米金利動向につれる格好で一時週安値となる144.55円まで下押しした。24日、ドル/円はアジア株が堅調推移する中、145円台前半へじり高推移。海外時間は米新規失業保険申請件数の良好な結果を受け、米金利上昇につれ146円に向け上昇する展開となった。25日のドル/円は、146円付近での取引が続く中、海外時間にはジャクソンホール会議でのパウエルFRB議長の講演を受け一時145円台後半まで下落するなど神経質な展開となった。ただ、パウエルFRB議長の「追加利上げは適切な場合に実施する」という発言も意識されてかドル買い優勢になると年初来高値となる146.64円まで上昇、結局146.47円で越週した。

今週のドル/円は米8月雇用統計を中心に数多くの経済指標の発表を控えている。先週末のジャクソンホール会議でのパウエルFRB議長発言を受け、年内追加利上げ織込みは足許65%程度まで上昇。今週のデータ次第では一段と利上げ織込みの上昇にドル/円は底堅く推移すると予想する。注目の米8月雇用統計では非農業部門雇用者数が前月比+17万人前後と前回からの鈍化が予想されている。米7月雇用統計では非農業部門雇用者数が市場予想を下回ったことに加えて5・6月分の雇用者は下方修正され冴えない内容となった。7月分に続いて8月分でも労働市場の鈍化が確認される場合には、ドルの下落リスクとなるだろう。ただ、円を買う材料は見当たらない上、ドル/円の下落時では相応に押し目買いが入りやすく下値は限定的と予想する。29日(火)は米7月JOLT求人、30日(水)は米8月ADP雇用統計、31日(木)は7月個人支出およびPCEデフレーター、9月1日(月)は米8月雇用統計、米8月ISM製造業景況指数の発表を控えている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/21~8/25)の値動き: 安値 144.55 円 高値 146.64 円 終値 146.47 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 松永 裕司

(1) 今週の予想レンジ: 1.0650 ~ 1.1000 156.00 ~ 159.50 円

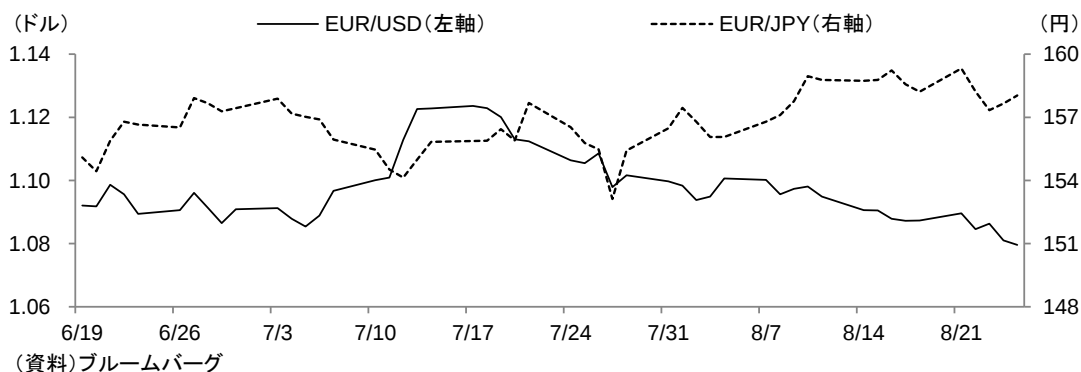
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、ユーロ圏の景気失速感が意識される中、下落した。21日、1.0875でオープンしたユーロ/ドルは、欧州株の堅調推移を横目に、一時1.09台に乗せた。22日、ユーロ/ドルは、欧州株の続伸を受け一時週高値となる1.0930まで上値を伸ばすも、その後は独金利低下に合わせ1.08台半ばに反落した。23日、ユーロ/ドルは、ユーロ圏8月製造業/非製造業PMI(速報)の弱い結果を受け、独金利動向につれ1.0802に急落も、NY時間には米金利低下を受け、1.08台後半に値を戻した。24日、ユーロ/ドルは、堅調な米労働指標を受けた米金利上昇を背景に、1.08台前半に下落した。25日、ユーロ/ドルは、ドル買い相場が続く中、東京時間から軟調に推移。ジャクソンホール経済シンポジウムでのパウエルFRB議長の発言を受け乱高下するも、その後は米長期金利の上昇を受け、一時週安値の1.0766まで下落。その後1.07台後半まで戻して越週した。

今週のユーロ/ドルは上値の重い展開を予想。先週公表されたユーロ圏8月非製造業PMI(速報)は今年初めて節目となる50を割り込むなど、欧州の景気後退懸念が強まるとともにユーロも軟調に推移した。中期的には、域内の内需縮小とこれによる貿易収支の改善がユーロのサポート要因になる可能性はあるものの、短期的には欧州経済の先行き不透明感からユーロは上値の重い推移が継続しそう。今週、欧州では31日(木)にユーロ圏8月消費者物価指数(HICP、速報)が公表予定。コアインフレ率の減速が確認されれば、ECBによる年内+25bpの追加利上げへの期待の後退とともにユーロ売りが加速する可能性には警戒したい。また、9月1日には米8月雇用統計が公表予定。先週のジャクソンホール経済シンポジウムで、パウエルFRB議長は改めてインフレ抑制を優先する姿勢を示しており、雇用統計で米国の賃金上昇が確認されれば、9月FOMCでの追加利上げの期待とともに、対ユーロでも一層のドル高が進む可能性もあり注目したい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/21~8/25)の値動き: (対ドル) 安値 1.0766 高値 1.0930 終値 1.0794
(対円) 安値 156.89 高値 159.49 終値 158.11



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 将行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2400 ~ 1.2800 182.00 ~ 187.00 円

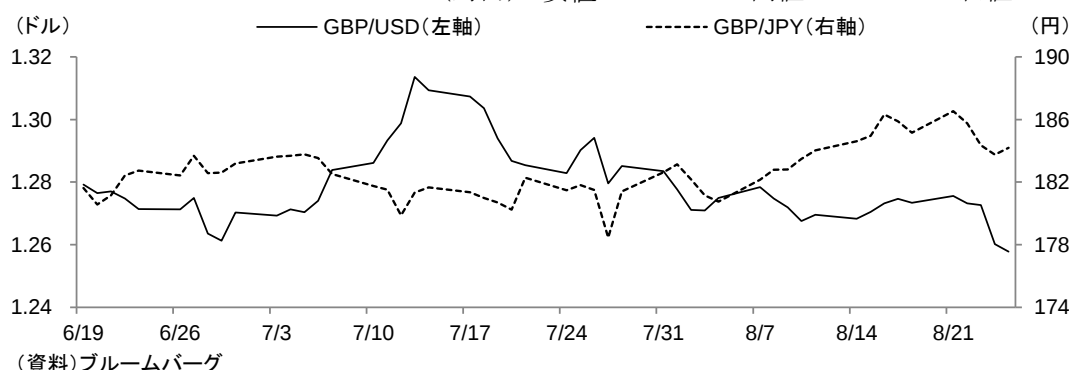
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は大幅に下落。最大の引き金となったのは、8月23日に発表された8月分のユーロ圏と英国のPMI速報値だった。特にユーロ圏の中核産業であるサービスのPMIは50.9から48.3に低下。市場予想(50.5)を下回り、今年初めて節目の50を下回った。英国のサービス業PMIも48.7と7月分の51.5から低下した。PMIのデータは、欧州中央銀行(ECB)とイングランド銀行(BOE)の金融引き締め策によるブレーキが、遂にサービス業にも及んでいることを示すものであろう。同日に公表された米国のISM景況感指数が製造業・サービス業で共に市場予想を下回ったことを受け、終盤にユーロとポンドは持ち直したものの、PMIの2日後の8月25日に公表されたドイツの8月分のIFO指数も、状況が相当に困難であることを示唆するものとなった。8月25日のジャクソンホール会議でのパウエルFRB議長の講演は、内容に新味は無いように感じられたものの、ドル高で反応。「一段の引き締めが正当化されることもありうる」という発言が意識されたとの見方が目立つ。そうした解釈を完全に否定するものではないものの、やはり今週1週間を通じて見れば欧州経済の弱さが強烈に意識されていたことが、パウエルFRB議長の講演に新味が無かったことを受けて欧州通貨下落、ドル高に市場が動いた背景にあるように感じられる。8月25日の夜に行われたECBのラガルド議長の講演も新味の無い内容。インフレ率を目標値に引き下げるために必要に応じて金利を高水準に設定し、必要な限りその水準に維持すると述べている。

今週1週間の英ポンド相場は引き続き上値の重い展開が続くだろう。先週発表されたユーロ圏、英国のサービス業PMIの弱さは、「利上げにも関わらず消費を中心に景気は底堅い」という認識から、「金融引き締めによって製造業だけでなくサービス業にもブレーキがかかっている」という認識へ、市場の見方を大きくシフトさせた公算が大きい。今週発表される経済指標に、そうした見方を覆すだけのインパクトがあるものは見当たらない。イングランド銀行(BOE)高官の講演予定では、チーフエコノミストのヒュー・ビル氏の講演が8月31日に控えている。ヒュー氏は「英国の市民は物価上昇による生活水準の歴史的な悪化を回復しようとするのではなく、以前よりも貧しくなったことを受け入れる必要がある」と主張するなど物議を醸す発言をしてきただけに、実際に消費にブレーキがかかりつつある状況を受けて、どのような見解を示すかが注目される。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/21~8/25)の値動き: (対ドル) 安値 1.2548 高値 1.2800 終値 1.2577
(対円) 安値 183.36 高値 186.77 終値 184.20



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6350 ~ 0.6500 93.00 ~ 95.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週は0.64近辺でスタートし、週高値の0.6488へ上昇後、週末のパウエルFRB議長講演で週安値の0.6380へ下落し、0.64近辺へ再度戻した。21日は0.64を挟んで終始ナローレンジで振幅。中国人民銀行が1年物ローンプライムレートを▲10bp引き下げるとも下げ幅が市場予想より小さかった事や隣国NZの7月貿易収支が赤字となった事を背景に豪ドルは重く推移した。加えてパウエルFRB議長の講演を週末に控え、米国債売りが広がると(利回りは上昇)、ドル買いの流れから豪ドルは一時0.6388まで下落。但し引けにかけてハイテク銘柄を中心に米株が持ち直すと0.64台へ回帰。豪ドル/円はドル/円上昇の動きに牽引される形で一時93.91まで上昇した。22日は0.6414でスタート後、一日を通して0.64台前半を中心に推移。23日、豪8月PMI各種はいずれも前回値を下回ったものの、豪輸出勢による豪ドル買いフローが交錯し、一時0.64半ばまで上昇。フローが一巡すると0.6410近辺まで下げたものの、NY時間に米8月PMI各種がいずれも予想比、前回比を共に下振れし、製造業PMIに関しては再び景気判断の分かれ目となる50を下回った。これを受けてリセッションのハードランディングを避けるためFRBによる利上げが停止されるとの観測が広がり、米株が反発するとドル売りを背景に豪ドルはショートカバーで踏み上げられ、一時0.6481まで上昇した。24日はポジション調整フローやジャクソンホール会議を警戒したドル買いの動きから豪ドルが下落。米新規失業保険申請件で堅調な米雇用環境が続いている事が示され、米株式市場は力強くスタートしたものの、パウエルFRB議長の講演を警戒し米国債利回りがじわじわと上昇する動きにドル買い優勢となり、豪ドルは0.64台前半へと沈み、NY引けは0.6417となった。25日は0.6413でスタート後、日中はジャクソンホール会議を控えて0.64台前半を中心に推移し、NY時間にパウエルFRB議長が講演で慎重に政策を進めていくスタンスを示すと、市場では次回9月のFOMC会合で政策金利を据え置くとの見方から、ドル売りを背景に一時0.6442まで上昇した。但し今後の米金融政策方針を決定的に示すような材料に欠けた為、豪ドルは0.6380へ沈み、0.6403で越週した。

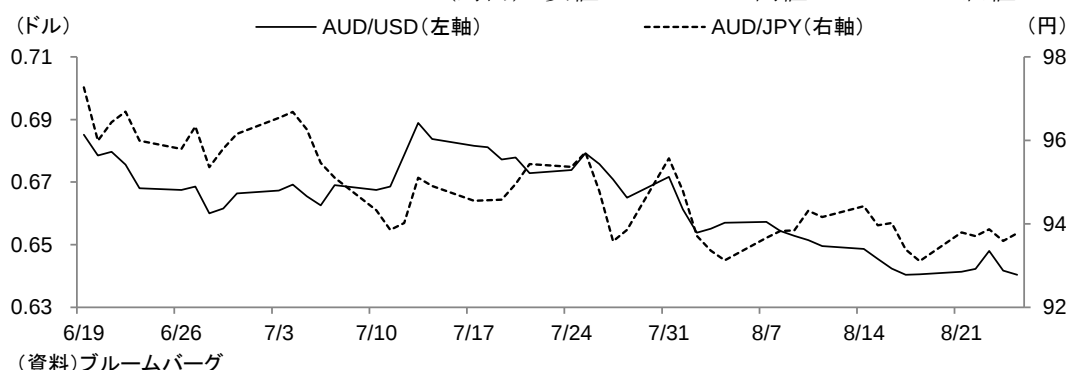
今週は28日(月)豪7月小売売上高、29日(火)次期総裁であるブロック副総裁の講演、米7月JOLT求人、30日(水)豪7月CPI、米8月ADP雇用統計、米4～6月期GDP、米4～6月期個人消費、米4～6月期コアPCE、中国8月PMI各種、米新規失業保険申請件数、米7月PCEコアデフレーター、9月1日(金)米8月雇用統計などが予定されている。ブロックRBA副総裁はハト派寄りとの見方が大方で、豪7月CPIは前月から継続して下落傾向と予想されている。また中国PMIに関しても前回比下振れが予想されており、豪ドルにとっては重い材料が多い。また、米7月PCEコアデフレーター(前年比)が前回比上振れするリスクがあり、そうなれば週を通して豪ドルは頭を押えられる可能性が高い。但し9月FOMC会合前の最重要材料が1日発表の米8月雇用統計となる為、流れが変わる可能性にも留意したい。この他、週末に中国が失速する国内経済でこ入れの為、4つの税負担軽減策の延長や株式取引にかかる印紙税を28日から半減させる事を発表しており、あわせて市場の反応と進展を見守りたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/21～8/25)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6380 高値 0.6488 終値 0.6403

(対円) 安値 92.84 高値 94.18 終値 93.78



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。